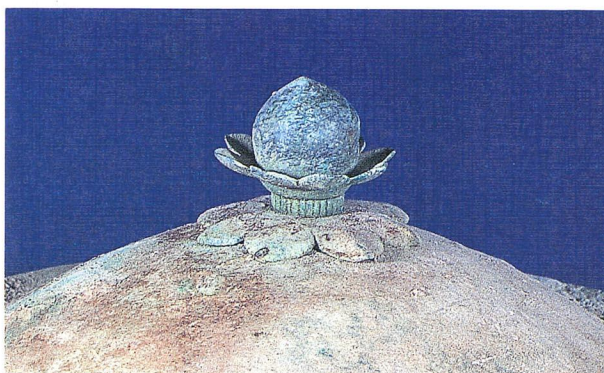


香色山山頂遺跡群調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4～



1996年3月

善通寺市文化財保護協会

序

弘法大師誕生地である善通寺市の西方には、大師ゆかりの名がつけられた五つの山々が屏風のように並び、「五岳山」と呼ばれ市民に親しまれております。特に総本山善通寺の西側に隣接する香色山には、山裾を一周するミニ八十八カ所巡りコース（1.6km）があり、早朝から多くの市民がこの山を訪れています。

香色山は山頂からの眺望もすばらしく、展望所からは丸亀平野はもちろんのこと、瀬戸内海の島々や対岸の岡山まで見渡すことができます。

このすぐれた環境は古代から受け継がれてきたもので、五岳山全域には青銅器埋納遺構や古墳、祭祀遺構、寺院など古代から近世に至る多様な遺跡の存在が知られております。

先人はこの地をととても神聖な場所として見ていたのですが、私たちは貴重な自然環境などに対して無関心になりがちで、このたび、私たちがいつも歩いていた地面の直下から、1号経塚のような貴重な遺構や遺物が発見されたことは、この地に住む者には大変な驚き、そして喜びでありました。

現地を訪れる登山道の表示板に、当市の古代文化を心から愛し、研究されていた矢原高幸氏が「総本山善通寺西方四至香色山霊蹟」という言葉を残されています。これまではなにげなく見ていた言葉でありましたが、今では、この山々も先人が我々に残してくれた貴重な文化遺産であることを再確認し、誇りに感じております。

このたびの善通寺市内遺跡発掘調査事業実施にあたり、ご協力をたまわりました関係機関の方々、また報告書刊行にあたり、ご指導をたまわりました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者の皆様のご苦勞にも心から感謝申し上げます。

平成8年3月31日

善通寺市教育委員会
教育長 勝田英樹



例 言

1. 本書は善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業では善通寺市善通寺町字平谷1050-1（香色山）において、平成7年7月10日から同年9月6日までは山頂部、同年12月9日には北側山裾部で発掘調査を実施し、平成7年9月7日から平成8年3月31日まで調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。
3. 本調査は香色山山頂遺跡が中心であるため、報告書名は「香色山山頂遺跡群調査報告書」としたが、北側山裾部の調査結果も併せて掲載した。
4. 本書の編集作成は善通寺市教育委員会 文化振興室主事 笹川龍一が行い、1号経塚と出土遺物に関しては、奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館学芸室 文部技官 杉山 洋氏から玉稿を賜った。杉山氏には1号経塚確認直後から、調査・分析に関して多岐に渡りご指導頂いた。また、銅製品の分析やクリーニングについては奈良国立文化財研究所にご協力頂いた。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。
5. 補助事業の中で実施された、各遺構の実測や周辺部の測量調査及び遺物の実測は四国学院大学考古学研究会の協力を得て笹川が行った。また、本文中に掲載した鉄製品の実測図は香川県工業技術センターのご協力でX線写真撮影を行い、これと遺物を基に作成した。
6. 本事業実施及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供、助言を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

総本山善通寺、奈良国立文化財研究所（町田 章・肥塚隆保・杉山 洋・牛嶋 茂）、奈良国立博物館（井口喜晴・阪田宗彦）、文化庁記念物課（坂井秀弥・西田建彦）、香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、香川県工業技術センター、金剛院（満濃町）、安藤文良、岡本桂典、片桐孝浩、川畑 聰、小西利幸、原 卓

調査参加者：（四国学院大学考古学研究会）宮脇 勝、内田賢一、岡村幸広、米田克彦
奥村雅信、西 智也、矢野由紀子、矢野愛子、小松健志、牧野 洋

目 次

第一章	遺跡周辺の地理と歴史	6
第二章	調査の概要	12
	① 1号小児壺棺墓	16
	② 2号小児壺棺墓	17
	③ 1号石棺墓	18
	④ 2号石棺墓	19
	⑤ 3号石棺墓	20
	⑥ 1号経塚	21
	⑦ 2号経塚跡	34
	⑧ 3号経塚跡	35
	⑨ 配石遺構	36
第三章	小 結	37
第四章	1号経塚と出土遺物	38
第五章	ま と め	40

挿 図 目 次

第1図	調査地遠景	6
第2図	調査地と周辺の主要遺跡	9
第3図	香色山全景	12
第4図	香色山周辺地形図	12
第5図	香色山山頂の状況	13
第6図	香色山山頂石像の背面碑銘	13
第7図	香色山山頂地形図（遺構配置図）	14
第8図	2号小児壺棺墓露出状況	15
第9図	2号小児壺棺墓周辺地形図	15
第10図	1号小児壺棺墓検出状況	16
第11図	1号小児壺棺墓実測図	16
第12図	1号小児壺棺墓出土土器棺	16
第13図	1号小児壺棺墓土器棺実測図	16
第14図	2号小児壺棺墓検出状況	17
第15図	2号小児壺棺墓実測図	17
第16図	2号小児壺棺墓出土土器棺	17
第17図	2号小児壺棺墓土器棺実測図	17
第18図	1号石棺墓露出状況	18
第19図	1号石棺墓検出状況	18
第20図	1号石棺墓実測図	18

第21図	2号石棺墓露出状況	19
第22図	2号石棺墓検出状況	19
第23図	2号石棺墓実測図	19
第24図	3号石棺墓露出状況	20
第25図	3号石棺墓検出状況	20
第26図	3号石棺墓実測図	20
第27図	1号経塚上部遺物出土状況	21
第28図	1号経塚上部石郭検出状況	21
第29図	1号経塚上部石郭実測図	21
第30図	1号経塚上部石郭上面検出状況	22
第31図	1号経塚上部石郭中層検出状況	22
第32図	1号経塚上部石郭中層実測図	22
第33図	1号経塚上部石郭銅板製経筒出土状況	23
第34図	1号経塚上部石郭下層検出状況	23
第35図	1号経塚上部石郭下層実測図	23
第36図	1号経塚実測図(全体図)	24
第37図	1号経塚最下層検出状況	24
第38図	1号経塚上部石郭出土土師質外容器	25
第39図	1号経塚上部石郭出土遺物	25
第40図	1号経塚上部石郭出土鉄器	26
第41図	1号経塚上部石郭出土遺物実測図	26
第42図	1号経塚下部石郭出土銅板製経筒と瓦質外容器	27
第43図	1号経塚下部石郭出土瓦質外容器実測図	28
第44図	1号経塚下部石郭出土銅板製経筒実測図	29
第45図	経筒底部に付着した経巻の痕跡	29
第46図	1号経塚下部石郭上層出土太刀	30
第47図	1号経塚下部石郭上層出土短刀	30
第48図	1号経塚下部石郭上層出土太刀実測図	31
第49図	1号経塚下部石郭上層出土短刀実測図	31
第50図	1号経塚下部石郭副郭出土短刀	32
第51図	1号経塚下部石郭副郭短刀出土状況実測図	32
第52図	1号経塚下部石郭副郭出土短刀実測図	32
第53図	1号経塚出土瓦片・白磁片	33
第54図	1号経塚出土刻印瓦片	33
第55図	1号経塚出土瓦片・白磁片実測図	33
第56図	1号経塚出土刻印瓦片拓影及び実測図	34
第57図	2号経塚出土遺物	35
第58図	2号経塚出土遺物実測図	35
第59図	3号経塚出土外容器	35
第60図	3号経塚出土外容器実測図	35
第61図	配石遺構検出状況	36
第62図	配石遺構実測図	36
第63図	配石遺構出土銭貨	36
第64図	配石遺構出土銭貨拓影	36

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師（空海）が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺市の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて推積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第1図 調査地遠景（北から）

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第Ⅰ様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2～3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで溯ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中核的な集落遺跡がある。西の筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院あたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良く考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘

調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直孤文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

ここから北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅銚1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤

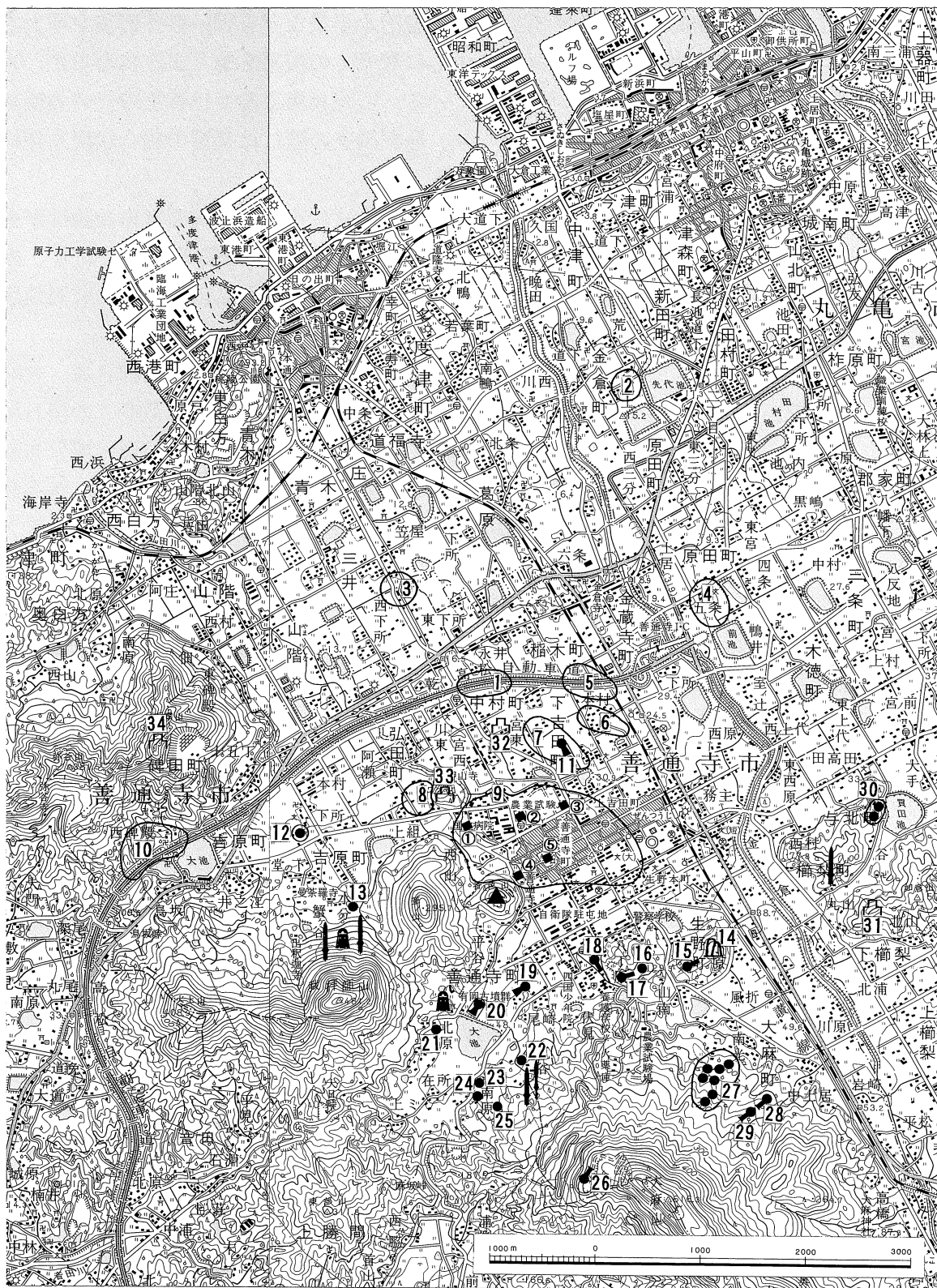
- | | | | | |
|----------|-------------|-----------------|--------------------|--------------|
| 1. 永井遺跡 | 9. 旧練兵場遺跡 | 12. 青龍古墳 | 20. 菊塚古墳 | 28. 大麻山椀袋塚 |
| 2. 中ノ池遺跡 | ①彼ノ宗遺跡 | 13. 大塚池古墳 | 21. 北原古墳 | 29. 大麻山経塚 |
| 3. 三井遺跡 | ②仙遊遺跡 | 14. 磨白山祭祀遺跡 | 22. 瓦谷1号墳 | 30. 陣山古墳群 |
| 4. 五条遺跡 | ③仲村廃寺(白鳳) | 15. 磨白山古墳 [史跡] | 23. 御館神社古墳 | 31. 櫛梨城跡(中世) |
| 5. 稲木遺跡 | ④善通寺西遺跡 | 16. 鶴が峰山頂古墳 | 24. 宮が尾1, 2号墳 [史跡] | 32. 仲村城跡(中世) |
| 6. 石川遺跡 | ⑤善通寺伽藍(奈良) | 17. 鶴が峰4号墳 [史跡] | 25. 宮が尾3号墳 | 33. 甲山城跡(中世) |
| 7. 九頭神遺跡 | 10. 矢ノ塚遺跡 | 18. 丸山古墳 [史跡] | 26. 野田院古墳 [史跡] | 34. 天霧城跡(中世) |
| 8. 甲山北遺跡 | 11. 下吉田神社古墳 | 19. 王墓山古墳 [史跡] | 27. 岡古墳群 | |

▲: 銅鐸出土地

┆: 銅剣出土地

┆: 銅矛出土地

▲ 調査地



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えこの地の勢力は更に発展を続けている。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区の古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛り土、後円部は積石で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野罐子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳（消滅）・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には、宮が尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、様々な点で興味は尽きない。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれていた。多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯の氏寺である伝導寺（仲村廃寺）が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、後に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられる。

奈良時代末、宝亀五年（774）この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生する。平安初期、大同二年（807）に唐から帰朝した大師が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時、四町四方の境内には金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては社会環境の大きな変化に伴い幾

度も荒廢の危機に曝され、戦国時代、永禄元年（1558）には香川、三好両軍の戦火により焼失してしまう。

善通寺の復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであり、この頃四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となる。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施され、善通寺市が誕生した。

参 考 文 献

『善通寺市の古代文化』	矢原高幸・善通寺市	1973年11月
『善通寺市史・第一巻』	善通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年3月
『稲木遺跡』	稲木遺跡発掘調査団	1989年3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年3月
『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)調査報告』	善通寺市教育委員会	1993年3月
『御館神社古墳発掘調査報告』	善通寺市教育委員会	1993年3月
『青龍古墳調査報告書』	善通寺市教育委員会	1994年3月

～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書～

『中村・乾・上一坊遺跡』第一冊	香川県教育委員会	1987年3月
『矢ノ塚遺跡』第三冊	香川県教育委員会	1987年10月
『稲木廃寺』第六冊	香川県教育委員会	1989年3月
『永井遺跡』第九冊	香川県教育委員会	1990年12月

第二章 調査の概要

善通寺市では市内の遺跡のうち、資料が余り残されていないものについて、その保護を目的に、範囲や性格を発掘調査で確認する事業を国と県の補助を得て平成4年度から実施しており、本年度は総本山善通寺の西側に隣接する標高157mの香色山山頂部を調査対象とした。

香色山は全山が総本山善通寺の所有地である。山頂部は松枯れ等により樹木を失い、風雨による土砂の流出が著しい。ここでは既に



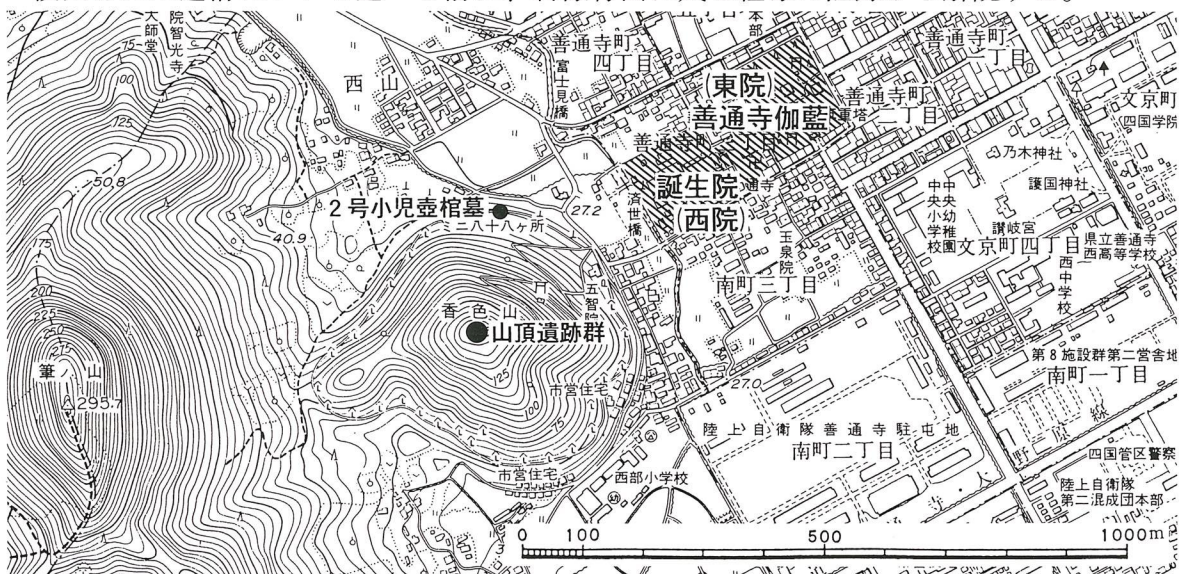
第3図 香色山全景(北から)

岩盤が露出しており、山頂部南側では組合式石棺の一部が地表に姿を表していた。現地踏査によって同様の遺構が付近に多数露出した状態で遺存していることが判明したが、このまま放置すれば、詳細を知る前に貴重な遺構が崩壊してしまう恐れがあると判断された。

また、山頂部中央には二体の石像が鎮座しており、背面にはその下に経塚が存在していることが記録されている。そして、この石仏の西側では数年前にも経筒の外容器と思われる土器が偶然発見されており、ここは経塚が群集した場所であることもわかる。従って、経塚や経塚に関連した遺構も存在する可能性が高いと考えられた。

そこで、これらの貴重な遺構が失われてしまう前に発掘調査による記録保存を行い、保存のための基礎的な資料を得ることを目的として事業を開始した。

検出された遺構について述べる前に、石像背面に残る経塚の記録から解説する。



第4図 香色山周辺地形図

石像是不動明王と愛染金剛王である。いずれも高さ1 m・幅80 cm・厚さ40 cm程の板状の花崗岩に浮き彫りにされたもので、この背面に碑銘が陰刻されている。その内容は「再瘞經函之銘并序（再び經函を瘞（埋）めるの銘並びに序）として、「寛政壬子（1792）二月にこの地を掘削した際に、經石の中から甕に納められた銀製經函三点が偶然発見された。甕が壊れていたものは經函も傷んでいたが、甕が無事なものは經函も完全に残されていた。その大きさは径三寸（約9 cm）・長さ一尺（約30 cm）である。同年六月に再び同じ場所に埋め戻し、二明王像をこの上に安置した。」というものである。

碑銘奥書きには「寛政壬子秋九月・誕生院權僧正寛充誌」とある。

この經塚の構造や形態は不明である。「銀」製經函については、塗銀かそれに類似したものではないかと考えられる。また經「函」という表現は、大きさを径と長さで記している点から、一般的な円筒形の經筒である可能性が高いと判断されるが、この大きさは円筒形の經筒であれば平安時代後期頃の所産と推定される。

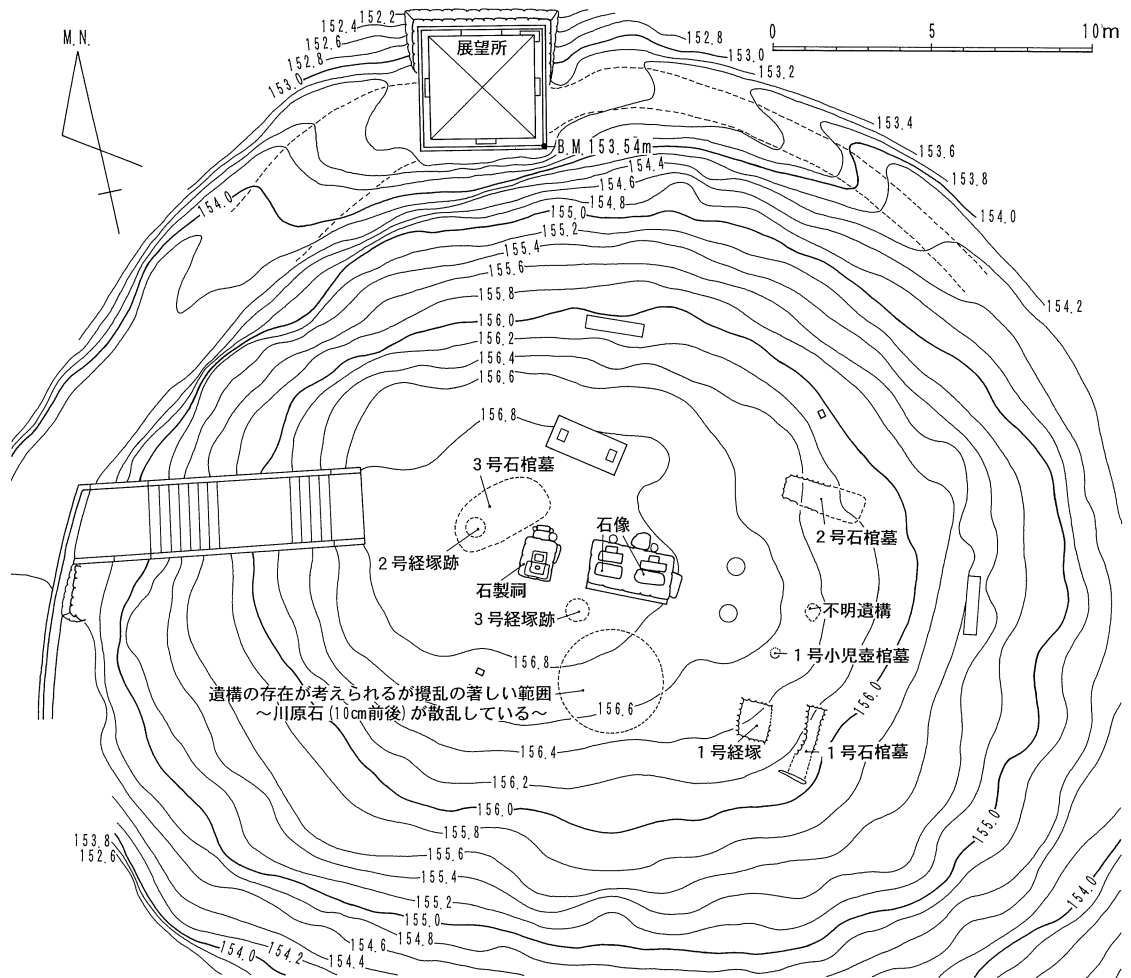
1961年の香川県考古学会報告に「香色山経塚について」として安藤文良氏がこの碑銘の分析を行っているが、この石像から南東4～5 mの所で確認された弥生時代後期の小児壺



第5図 香色山山頂の状況（南東から）
（写真中央が碑名のある石像、手前に露出した石列が石棺墓）



第6図 香色山山頂石像の背面碑銘（南から）



第7図 香色山山頂地形図(遺構配置図)

棺墓の様子から、当時の地表面は現在より50cm程高かったものと推定している。実際に山頂部には土は無く、一面に乳灰白色の岩盤が露出しており、表面は風化が進み角礫が散乱した状態である。周辺の山々は大半が花崗岩や安山岩、凝灰角礫岩などであるが、香色山は全山が乳灰白色の流紋岩である。この石材は山頂部以外でも至る所に露頭地があり、比較的軟質な石材であることから、周辺に広がる弥生時代の集落遺跡からは砥石として利用されたものが多数出土している。

調査の結果、山頂部では弥生時代後期頃の所産と考えられる小児壺棺墓1基と石棺墓3基、平安時代末頃の経塚2基と配石遺構が確認されたが、遺構はいずれもこの岩盤を柱状節理に沿って剥がして造られた空間に、その石材を利用して構築されている。

各遺構は調査順に1号小児壺棺墓、1～3号石棺墓、1号経塚、2号経塚跡、近年発見された経塚を3号経塚跡とし、詳細は、16頁以降に掲載した。また江戸期に発見された経塚は4号経塚とした。

また、調査期間中に登山道脇のミニ八十八ヶ所巡りが設定されている遊歩道上に、小児壺棺が露出した場所があることが確認された。

そこで、山頂部の遺構群の調査終了後、当初より予定されていた別の発掘調査の終了を待ち、平成7年12月9日に発掘調査を実施した。

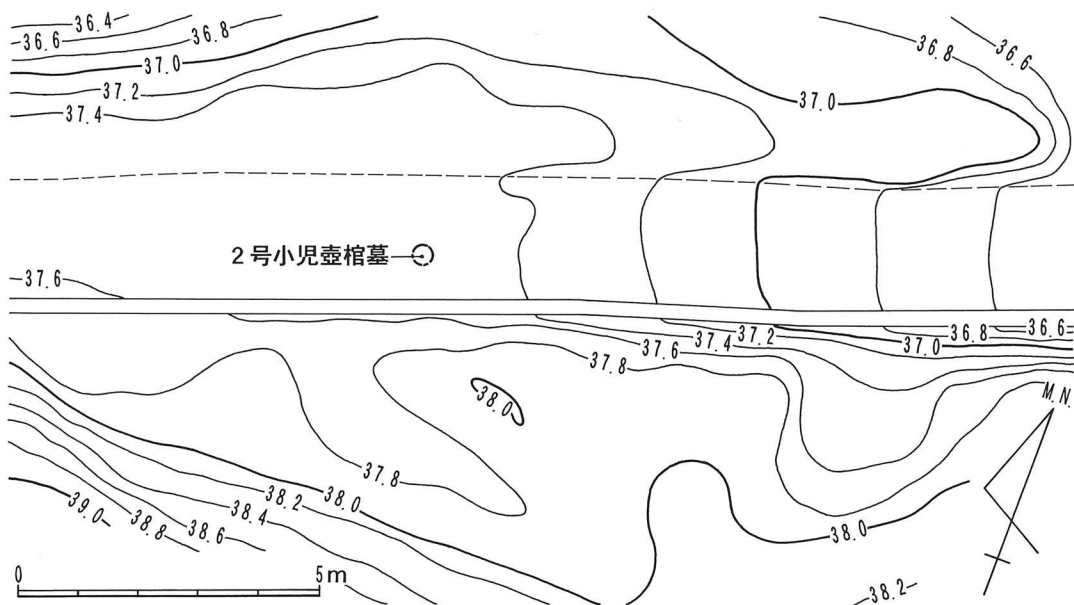
この場所は香色山の北側山裾部、標高39m程の位置であり、周囲の平地との比高差は10m程度である。香色山北方から東方にかけての平野部には、旧練兵場遺跡を中心とした弥生

時代から古墳時代にかけての中核的な集落遺跡がこの山の裾部にまで展開しており、小児壺棺墓も多数検出されている。この地域では成人の土器棺葬は確認されておらず、出土した歯などから小児に限った埋葬形態と考えられている。また、棺内に副葬品を埋納する習俗は無かったらしく、何らかの遺物が確認されたものは無い。副葬品が存在しないことから、時代の特定は棺やその蓋に転用された土器の形態に求めることになるが、これまでの類例から弥生時代後期を中心に行われた埋葬形態と考えられている。

この遺構は遊歩道整備の際の削平により露出したものである。周囲は比較的平坦な地形となっており、板状の石材が多数散乱していることなどから、この他にも石棺墓など、複数の墓が存在している可能性が高いが、今回は露出し破壊が懸念される小児壺棺墓のみの調査を実施した。この遺構は2号小児壺棺墓とし、詳細は17頁に掲載した。



第8図 2号小児壺棺露出状況(西から)



第9図 2号小児壺棺墓周辺地形図

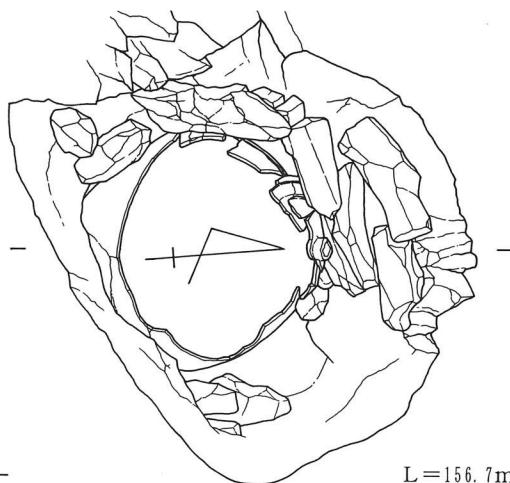


第10図 1号小児壺棺墓検出状況（西から）

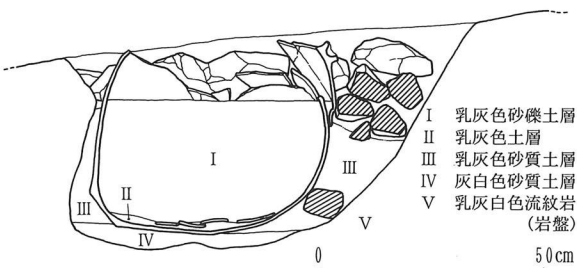
① 1号小児壺棺墓 山頂部の石像の西側約4 mの場所に岩盤を削り貫いた1 m四方の掘り方が認められた。ここには褐色の甕の断面が地表に露出しており、土器や遺構の様子から小児壺棺墓であることが容易に把握できた。

遺構は岩盤の節理を利用し柱状に石材を剥がして墓壙を構築し、頸部を欠いた壺形土器に高杯で蓋をした転用棺を埋納したものである。

土器棺の残存状況から遺構上部は30cm以上削平されていることがわかる。棺内から副葬品等の出土はないが、土器形態（第V様式後半）から弥生時代後期の所産と考えられる。



L=156.7m



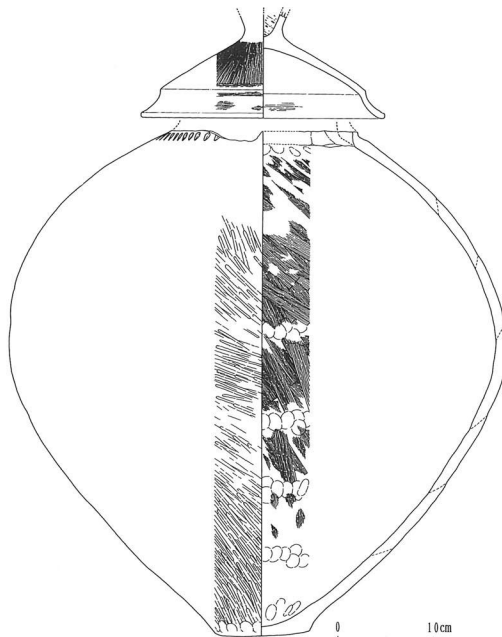
- I 乳灰色砂礫土層
- II 乳灰色土層
- III 乳灰色砂質土層
- IV 灰白色砂質土層
- V 乳灰白色流紋岩 (岩盤)

0 50 cm

第11図 1号小児壺棺墓実測図



第12図 1号小児壺棺墓出土土器



第13図 1号小児壺棺墓土器棺実測図

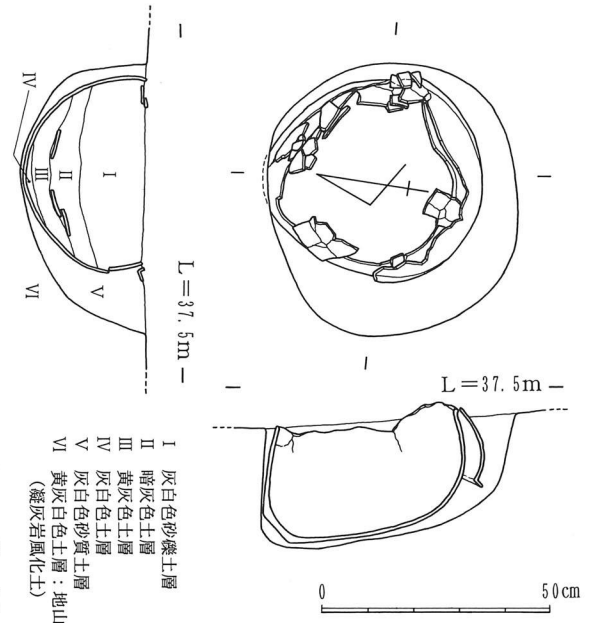


第14図 2号小児壺棺墓検出状況（北から）

② 2号小児壺棺墓 15頁で解説したように、調査期間中に香色山北側山裾部で偶然発見された小児壺棺墓である。遺構は遊歩道建設時に削平されており、1号壺棺墓同様に土器棺の断面が地表に露出していた。

遺構は凝灰岩風化土中に直径60cm程の楕円形の墓壙を掘り、頸部を欠いた壺形土器に大形の鉢形土器を被せて蓋をした転用棺を埋納したものである。土器棺と蓋の間には粘土が充填されており、密封度を高める工夫が施されていた。

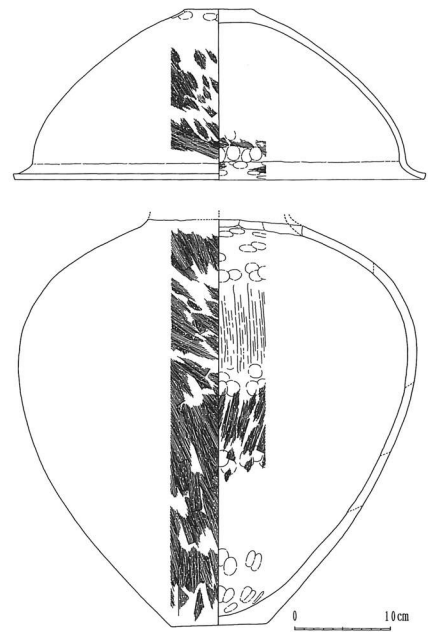
棺内から副葬品等は出土していないが、土器形態（第V様式前半）から弥生時代後期の所産と考えられる。



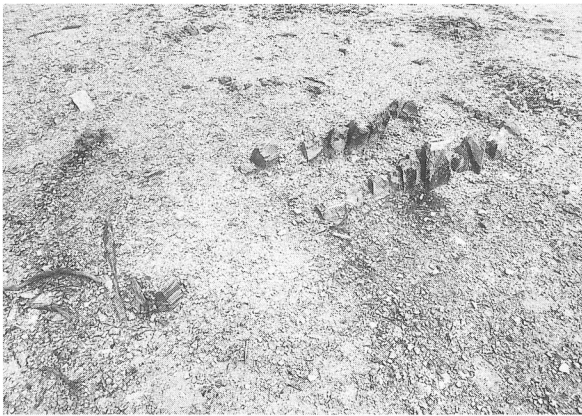
第15図 2号小児壺棺墓実測図



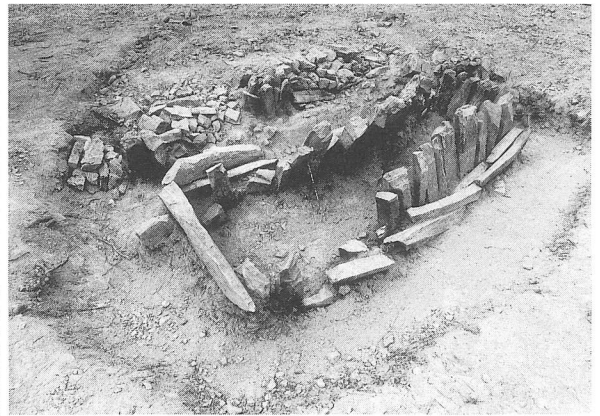
第16図 2号小児壺棺墓出土土器



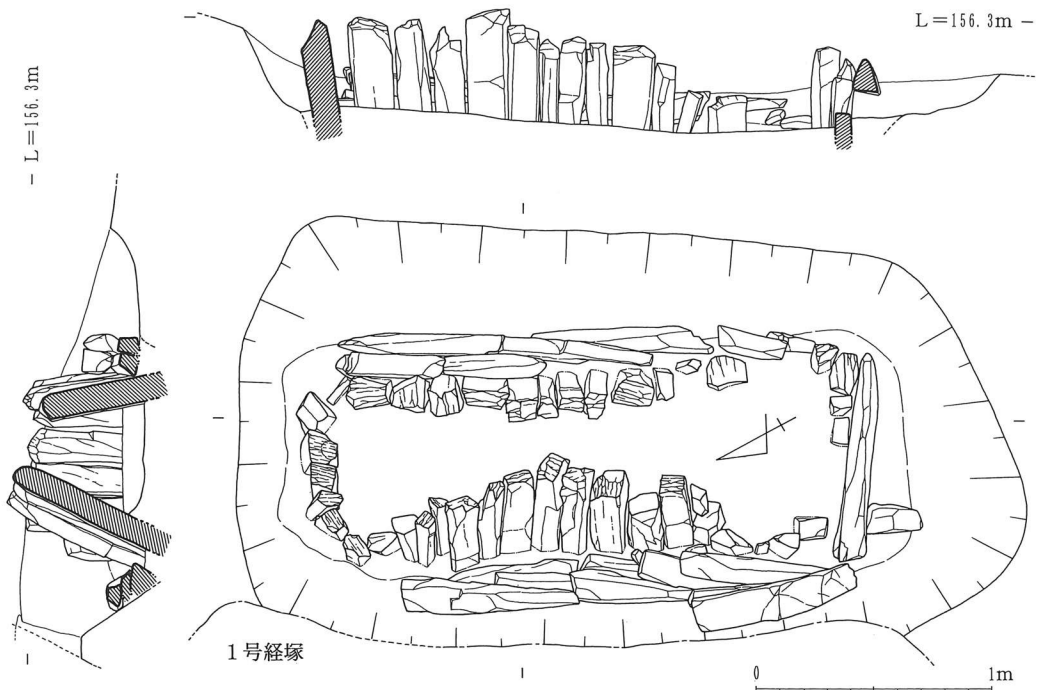
第17図 2号小児壺棺墓土器棺実測図



第18図 1号石棺墓検出前の状況（南東から）



第19図 1号石棺墓検出状況（南東から）



第20図 1号石棺墓実測図

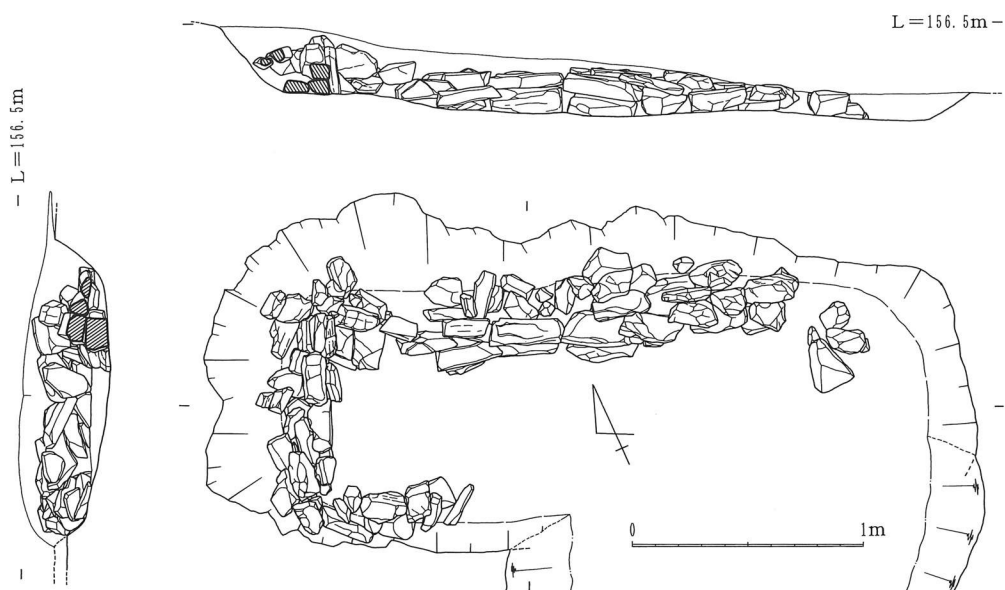
③ 1号石棺墓 山頂部の石像の南東側約6 mの場所に、岩盤を削り貫いた約3.5 m四方の掘り方が認められた。調査の契機となった石棺はこの掘り方の東側半分に露出しており、当初は2基の石棺が平行に並べて構築されているものと思われたが、西側には別な掘り方を持つ経塚が複合して存在していた。1号経塚とし21頁以降に解説した。1号石棺墓は岩盤の摂理に添って石材を剥がした墓壇に棒状石材を立てて並べて長方形の棺とし、これと同様の石材で取り囲むように置いて補強している。遺構は全体に攪乱され石材が抜き取られた部分もあり、蓋石等の上部構造は不明である。類例の無い特異な形態の石棺墓であり副葬品も確認されていないが、小児壺棺墓と同じ弥生時代後期頃の構築と考えられる。



第21図 2号石棺墓検出前の状況（南から）



第22図 2号石棺墓検出状況（南から）



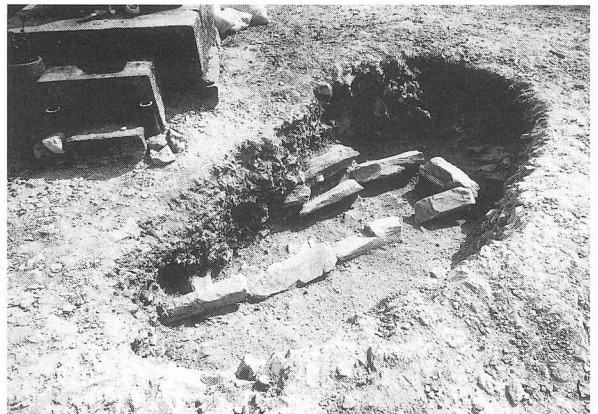
第23図 2号石棺墓実測図

④ 2号石棺墓 山頂部の石像の東側約6mの場所でも、東西方位に長い掘り方が確認された。この掘り方内、西側と北側の縁辺に沿って直線的に並ぶ石列が確認され、掘削前に石棺墓であることが予想された。発掘調査の結果、約20~30cm程の直方体状の石材を2~3段積み上げた石棺が確認されたが、他の遺構同様に上部構造は流出してしまっているため、本来の壁面の高さや蓋石などについては不明である。

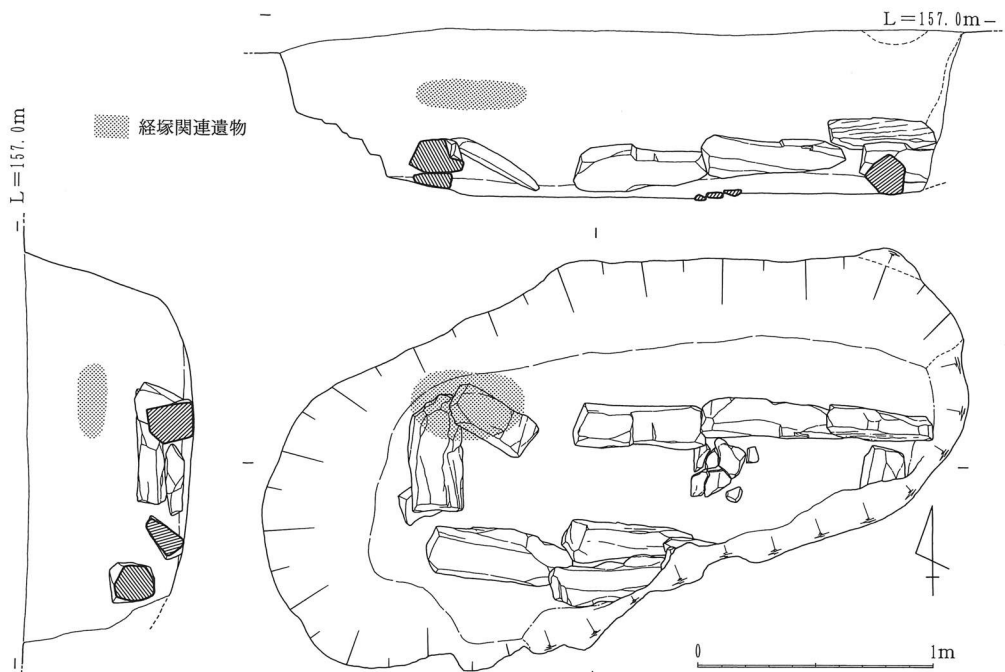
また南東側半分は攪乱を受け消滅しているが、部分的に基底部石材が残されており、東西2m、南北に50cm程の規模であったと考えられる。副葬品等は全く出土していない。竪穴式石室に似た構造ではあるが、墳丘等は形成していないようであり、これも小児壺棺墓と同じ弥生時代後期頃の構築ではないかと考えられる。



第24図 3号石棺墓検出前の状況(北から)



第25図 3号石棺墓検出状況(北から)



第26図 3号石棺墓実測図

⑤ 3号石棺墓 山頂部の石像の西側約2mに石製の祠がある。この北西側に東西に長い楕円形の大きな掘り方が認められた。石材は露出していないが、その形状から石棺墓を想定して発掘調査を行った。埋土は10~20cm程の流紋岩塊を多く含む粒子の細かい土で、地表面下20~30cmまで掘り下げた際に、北西側でガラス玉と銅銭、須恵器片、鉄器片が狭い範囲に集中して出土した。いずれも経塚の埋納品と思われるが、遺構は攪乱により消滅している。遺物の詳細は2号経塚跡として34頁以降に解説した。更に掘削を続け、地表面下約60cmで大型の石材で構築された石棺が確認されたが、遺存状態が悪く平面規模以外の詳細は不明である。掘り方は石棺墓掘り方の攪乱によるものと判明したが、隣接する祠の安

全のため調査はこの内部に留めた。遺構の時期等については不明であるが、やはり他の石棺と同じ頃に構築されたものと考えられる。

⑥ 1号経塚

当初は石棺墓を想定し、1号石棺と同時に掘削を開始したが、遺構上部の攪乱部分から銅鏡、銅板、青白磁片の他、多数の鉄器片と土師器片が出土した。埋土は流紋岩の角礫を多量に含む粒子の細かい土である。

遺物の出土状態を記録した後に埋土を除去すると方形の石郭が姿を表し、比較的残りの良い経塚であることが判明した。

石郭は1号石棺と同様に岩盤の節理に沿って剥がした棒状の石材を掘り方内に方形に並べ立てて石郭とし、下部にも同様の石材を並べて床面を構成している。石郭の北東隅部分は床面下まで攪乱（盗掘）が及んでおり、石材も失われていた。遺構の規模は南北に1m、東西に70cm、深さは床石材上面までで約30cmを計るが、下層検出中に床面南側石材の下に

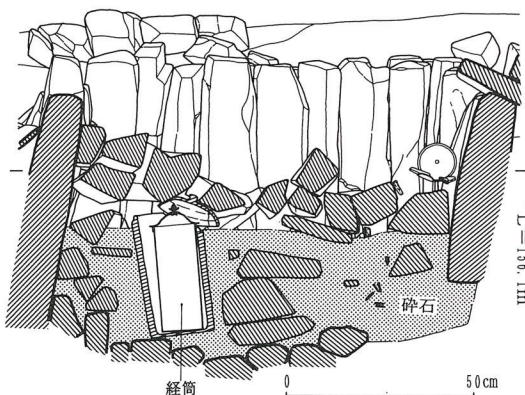


図27図 1号経塚上部遺物出土状況（南から）



第28図 1号経塚上部石郭検出状況（東から）

空洞部分が存在し、その隙間から経筒容器の上部が確認できた。容器は破損しているものの盗掘を受けた痕跡は無く、床面と思われた石材の下には別な石郭が存在することが判明した。二階建構造の経塚の報告例は他に無く、床面石材について蓋石の転落の可能性も考えたが、遺構や遺物の出土状況から見て、上下二段に石郭を有する特異な形状の遺構であることは間違いないようである。上部石郭の出土遺物は25頁以降に掲載した。



第29図 1号経塚上部石郭実測図

上部石郭の床面（下部石郭の蓋石でもある）の構造を記録し除去すると、その直下から経筒を納めた瓦質外容器の上部とU字形に折り曲げられた太刀が姿を表した。

石郭南側に置かれた経筒の露出状況などから、床面は30cm程度下方にあるものと考えられたが、下部石郭内は2～3cm程度に大きさが揃えられた多量の碎石を含む土砂で満たされており、上下石郭を仕切る石材はこの碎石や小さな割り石で支えられていた。

太刀は折り曲げられた部分で折れており、切先側は碎石上に置かれた状態であったが、把側は10cm程土砂に埋もれた状態で出土している。下部石郭に経筒と副納品が埋納され、しばらくして上部石郭に経筒や副納品を納める際に、手加えられた結果ではないかと考えられる。また、下部石郭上面には壁面沿い3箇所短刀が切先を上に向けた状態で立てられていた。側面的には上下石郭を仕切る石材で隠れた高さにあり、下部石郭内に経筒が



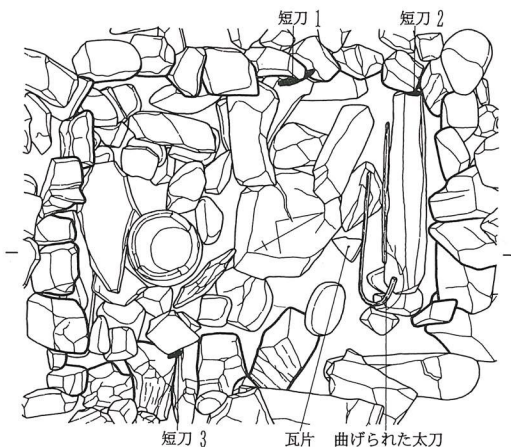
第30図 1号経塚下部石郭上面検出状況（東から）
～上部石郭床面石材除去直後の状況～



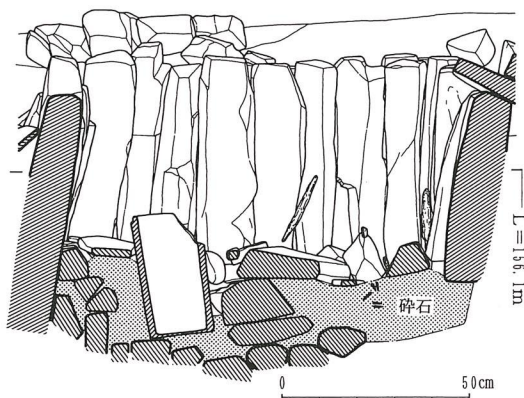
第31図 1号経塚下部石郭中層検出状況（東から）

埋納された際に太刀と共に置かれたものではないかと考えられるが、後に上部石郭内に経筒などが追納された際のものである可能性も残される。

経筒外容器の蓋の様子を記録し、これを取り上げると見事な蓮華飾りの鈕が現われた。銅板製経筒が完全な形で残されており、経巻が遺存する可能性を期待して、埋納状態を記録した後に経筒だけを取り上げ、更に遺構の検出を続行した。



短刀 1 短刀 2
短刀 3 瓦片 曲げられた太刀



第32図 1号経塚下部石郭中層実測図

碎石を多量に含む土砂の除去を続けると、石郭内を仕切る石材が姿を表した。盗掘により下層まで攪乱された石郭北東隅部分は不明であるが、北側と南側、西側の壁沿いには床面上に棒状石材が並べられている。恐らく石郭の補強が目的であろう。また、郭内中央部には比較的大きな石材を二段、東西方向に重ねて置き、下部石郭を二分している。経筒を納めた外容器は南側の主郭に置かれ、北側の副郭には北寄りに短刀が6本納められていた。



第33図 1号経塚下部石郭上銅板製経塚出土状況（東から）

この6本のうち5本は一ヶ所を中心に広がる形で錆により癒着しており、副郭に納める際に紐のようなもので一ヶ所を束ねていた様子が復元できる。折り曲げられた太刀はこの上からの出土であり、副郭の存在を意識して置かれたものと考えられる。下部石郭内出土遺物は27頁以降に掲載したが、下部石郭の主郭と副郭は経筒や短刀だけを埋納するには大きすぎる。この空間には既に風化し消滅した有機物等の存在を考える必要がある。

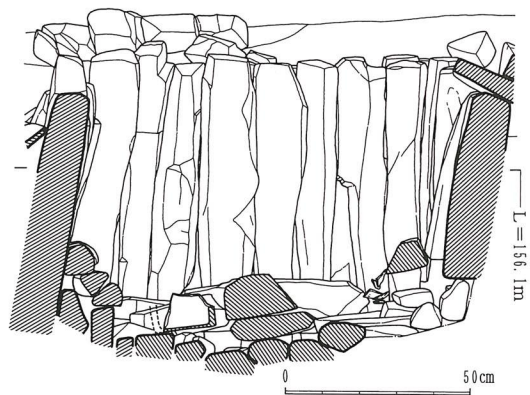
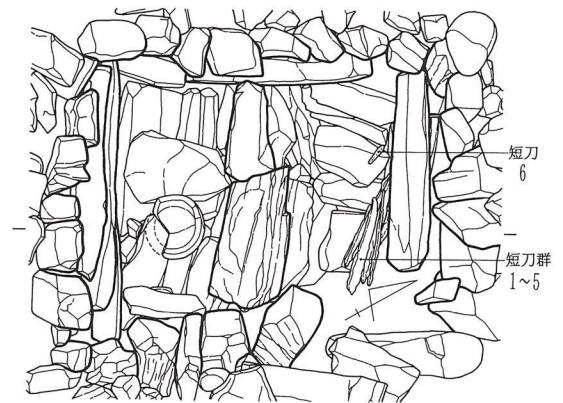


第34図 1号経塚下部石郭下層検出状況（東から）

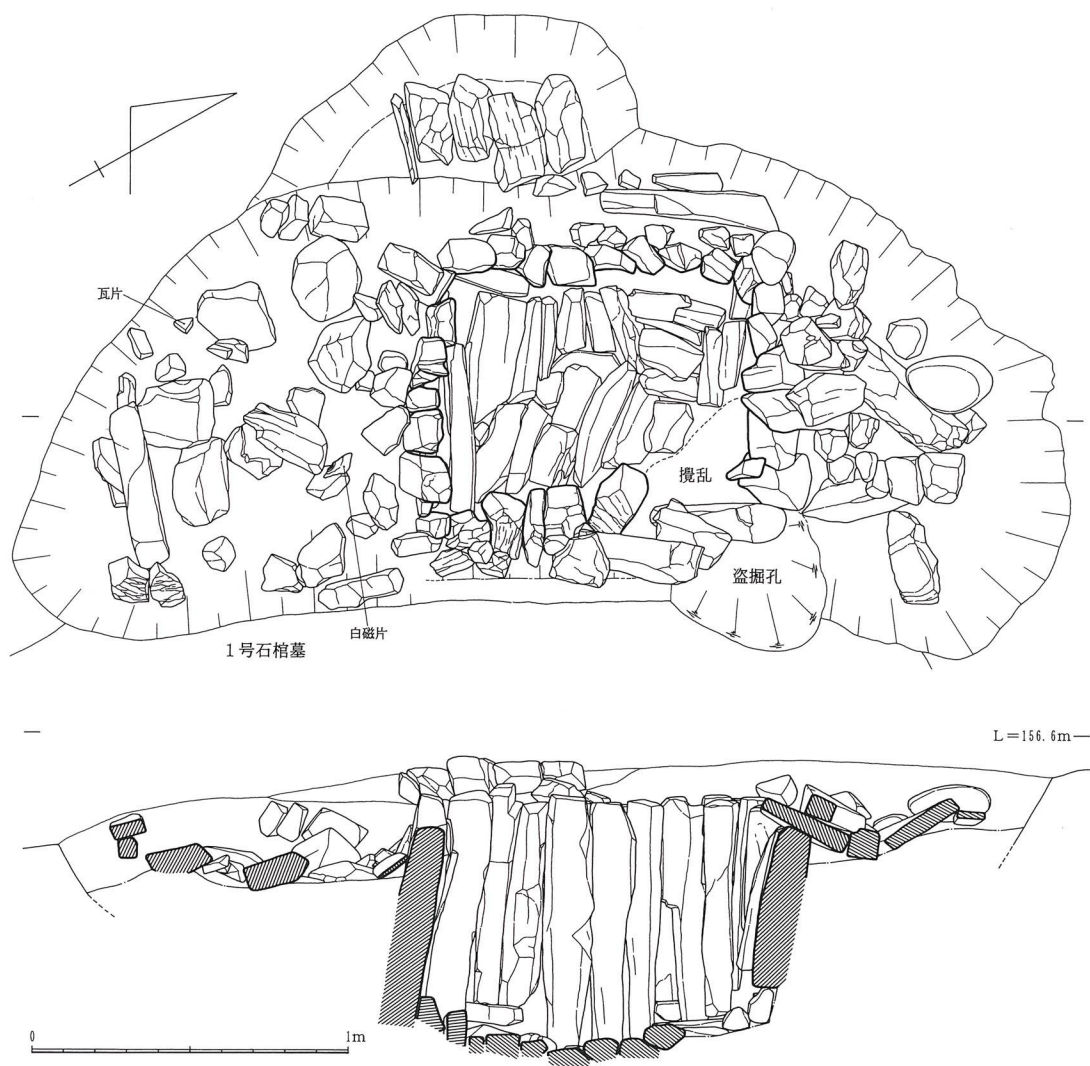
この経筒は上部石郭と下部石郭の二段構造であるばかりではなく、下部石郭も主郭と副郭に分かれるという極めて特異な構造であることが判明した。

下部石郭内は未盗掘であるために失われた遺物は無い筈であるが、一般的に経塚から出土するような副納品は認められない。立派な経筒があるにも関わらず、青白磁の容器や銅鏡は出土していないのである。

出土した副納品は折り曲げられた太刀や多



第35図 1号経塚下部石郭下層実測図



第36図 1号経塚実測図（全体図）

数の短刀と、遺構の構造と併せて極めて特異であり、願主の性格を反映したものであることも考えられる。

石郭北東隅の盗掘孔は床面下まで達していたため、この部分のみ更に掘り上げ、掘り方の底部を確認した。また、石郭の保存のために掘り方内は上層部分の検出に留めたが、多数の石材と共に、瓦片や白磁片が数点出土している。

1号経塚は他の遺構と同様に上部構造が失



第37図 1号経塚最下層検出状況（東から）

われており、蓋の構造等については不明であるが、掘り方西側に浅い掘り込みがあり、この中には高さを揃えた長さ30cm程の石材が南北方向に一列に並べられている。地表付近に何らかの構造物を伴っていた痕跡ではないかと考えられる。

また、下層埋土中からコバルトブルーのガラス小玉が一点だけ出土したが、これは弥生時代後期頃によく見られる遺物である。経塚構築の際には、隣接する1号石棺墓の蓋石など、遺構の一部を破壊し石材を転用した可能性があり、その際に混入したものではないかと考えられる。またこの位置に別な石棺墓が存在し、それを転用した結果であることも考えられるが、遺構保存のために解体調査を行っていないため不明である。

1号経塚では極めて貴重な遺構や遺物が確認された。今後の保存活用を期待し、除去していた石材を戻し、他の遺構と共に埋め戻した。以下、石郭別に出土遺物を解説する。

上部石郭出土遺物

上部石郭は盗掘による攪乱が著しいが、時代や遺構の性格を知る上で重要な遺物が石郭北側に多数残されていた。注目されるのは加工痕のある円形銅板や円筒形銅器片、12世紀後半頃の特徴を示す銅鏡（秋草双鳥鏡）で、同じ位置から蓋を有する円筒形土師質容器と青白磁の小皿が破碎状態で出土した。石郭南側には不明銅製品片が残り、石郭全体には前者とは異なる土師器片と鉄製器片が礫と共に散乱していた。

円形銅板の加工痕は円の大きさを調整することが目的であり、加工後の円弧は円筒形銅器片の円弧とほぼ一致する。銅製筒の底に円形銅板を押し込み底として容器を造り、銅鏡を蓋とした銅製経筒の存在が考えられる。また、土師質外容器は二組出土しているが、石郭内に散乱していた容器はごく一部しか遺存しておらず、銅製品などと共に出土した比較的残りの良いものが、その外容器として使用されていたものと考えられる。



第38図 1号経塚上部石郭出土土師質外容器

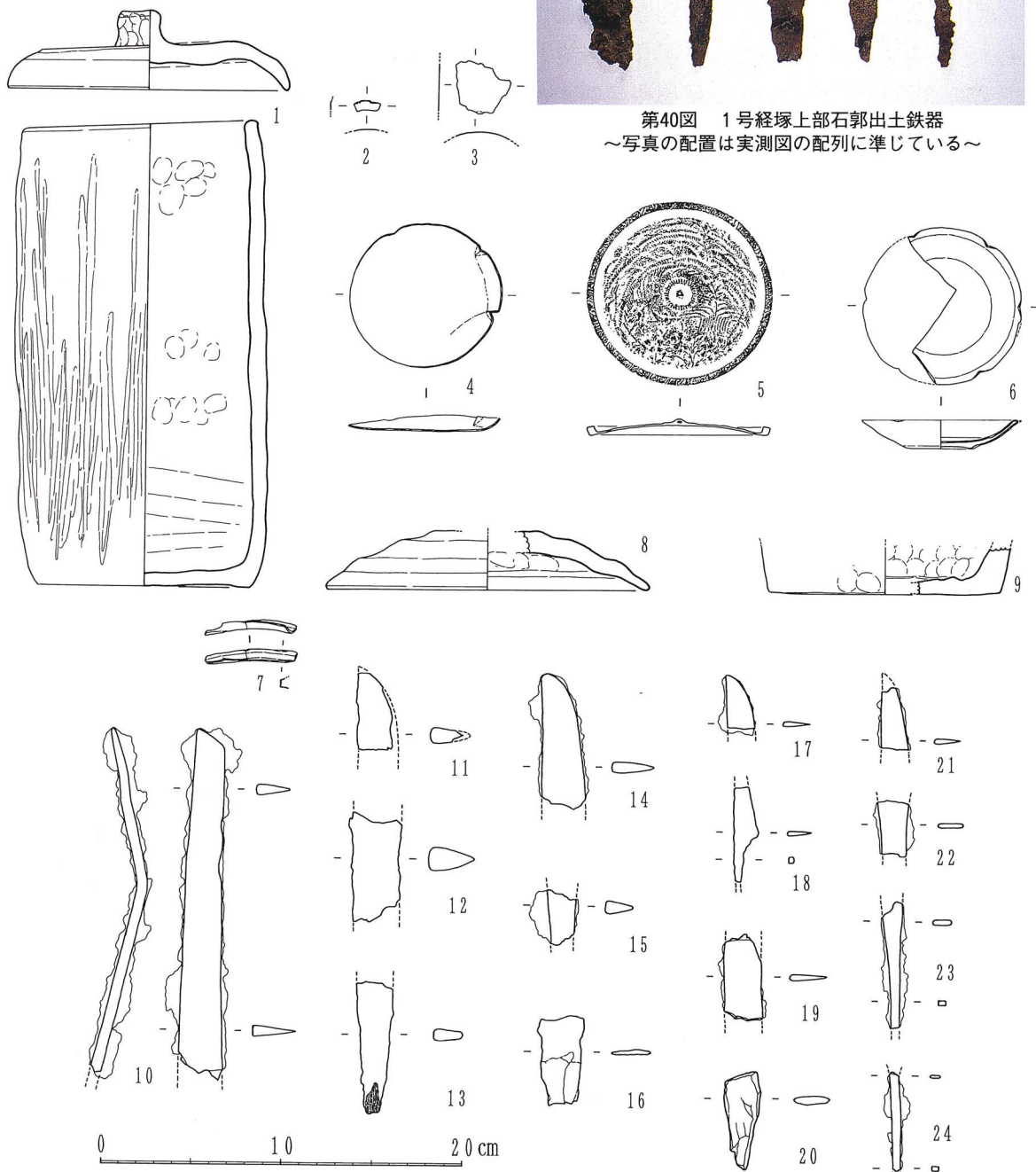


第39図 1号経塚上部石郭出土遺物
上段左から 秋草双鳥鏡・筒形銅板片・円形銅板
下段左から 青白磁(皿)・不明銅器片・土師器片

上部石郭からは攪乱された状態で多数の鉄器片が出土している。第41図に示した10は太刀の先端と思われるが、切先から10cm程の位置でくの字形に曲げられている。11~17は短刀か太刀の破片あり、18~21は刀子片、22~は刃部が認められず器種は不明である。



第40図 1号経塚上部石郭出土鉄器
~写真の配置は実測図の配列に準じている~



第41図

上部石郭出土遺物実測図

- 1. 土師質外容器
- 2. 3. 円筒形銅板片
- 4. 円形銅板
- 5. 秋草双鳥鏡
- 6. 青白磁(皿)
- 7. 不明銅器片
- 8. 9. 土師器片
- 10~24. 鉄器片

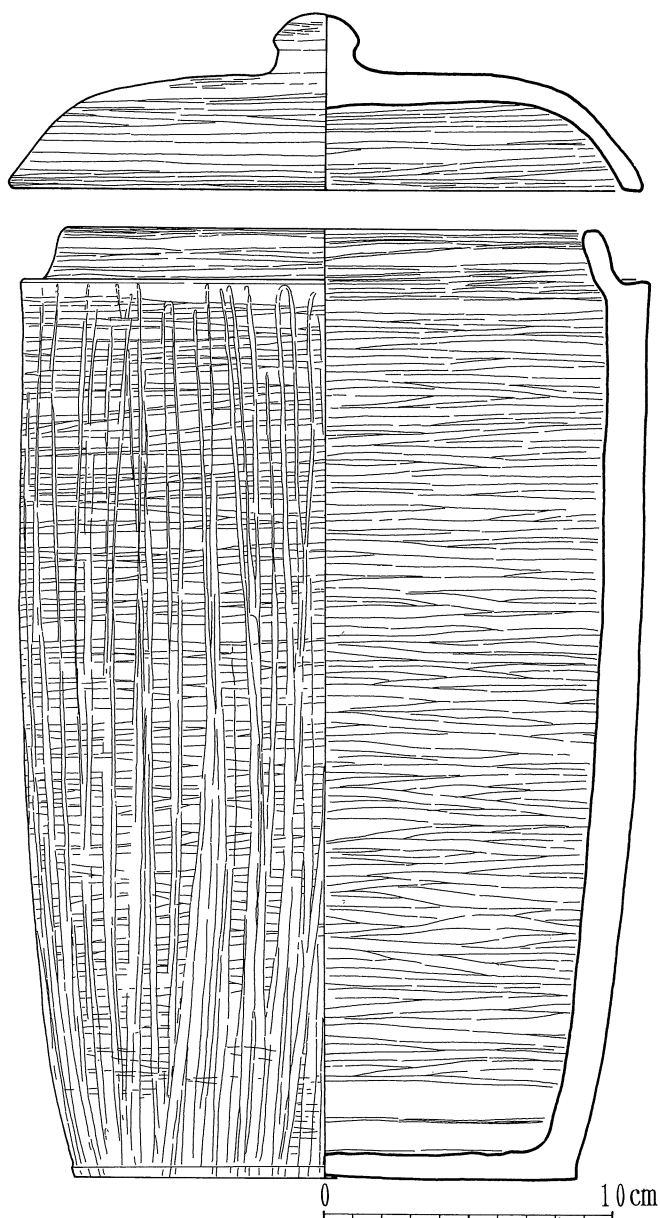
下部石郭出土遺物



第42図 1号経塚下部石郭出土銅板製経筒と瓦質外容器 ~奈良国立文化財研究所 牛島 茂 氏 撮影~

下部石郭から出土した遺物は主郭の経筒と外容器、そして副郭下層に埋納された6本の短刀、副郭上部に置かれていた折り曲げられた1本の太刀、下部石郭蓋石の周囲に切先を上にして立てられた3本の短刀である。下部石郭蓋石の周囲では、攪乱部分から短刀若しくは太刀の先端が出土しており、利器の総数は10本となる。

経筒の外容器は瓦質である。身と蓋は共に精良な胎土で焼成も良好、色調は外面が光沢



第43図 1号経塚下部石郭出土経筒外容器実測図

た経筒は銅板製であるが、鈕部分の装飾を含めて厚さ1.5mm前後の銅板が使用されており重厚な造りとなっている。重量は1.37kgを計る。筒部は225mm×394mmの長方形の銅板を丸め、5～7mm重複させて9箇所を鉤留めしている。底部には周囲5箇所突起を削り出した円板をはめ込み、円筒下端を叩き潰して固定したもので直径128mm、高さは225mmを計る。

口縁端部外面は蓋の見受けの内径に併せて幅9mmをヤスリで削り、隙間無く合致するように加工されている。

蓋も本体と同様の銅板を加工したものである。形状は緩やかな丸味を持った一段甲盛り

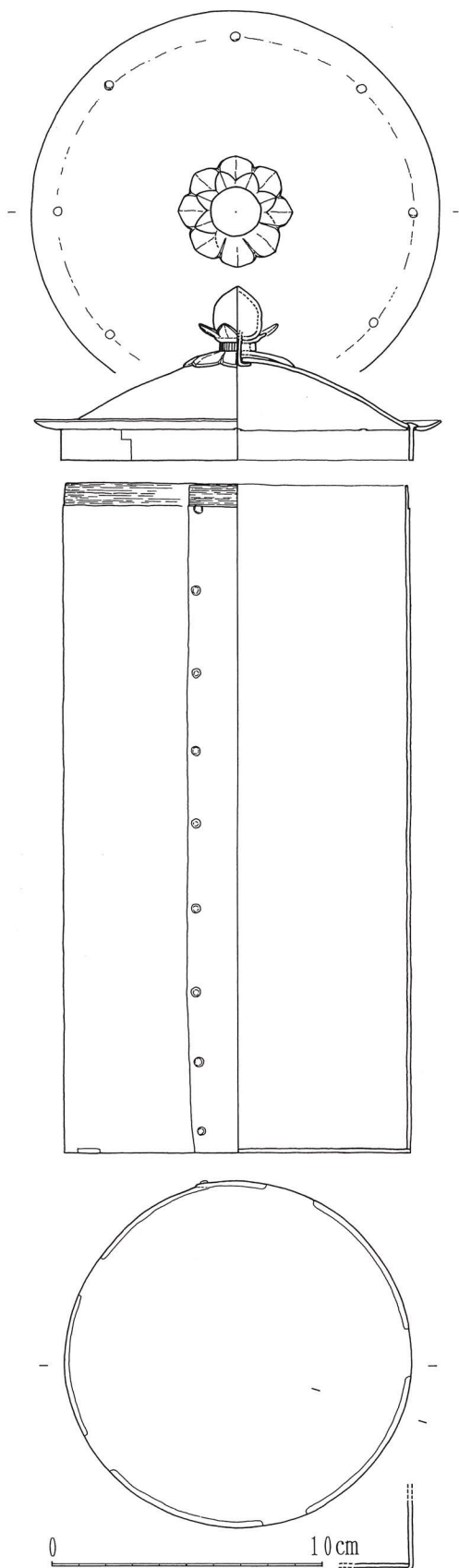
のある暗黒灰色で、数箇所焼成時に生じた灰白色の縦長い斑紋が残る。内面は明灰色を呈している。

身の表面の調整は横ナデ後に横方向の篋磨き、最後に縦方向に荒い篋磨きが施されている。内面は横方向の篋磨きが施されている。高さ330mm、最大径218mmを計る。

蓋は最大径219mm、高さ60mmで、器面全体に篋磨きが施されている。外面は横ナデのちに篋磨きが施されており、これはつまみ部分にまで及んでいる。つまみ周囲の篋磨きは#状になる可能性があるが劣化しており不明である。内面は横ナデ後横方向の篋磨きが施され、内面中央は同心円状の一筆描きの篋きである。

瓦質経筒外容器の生産は讃岐でも行われていたようであるが、この容器の造りは特に優れており、搬入品である可能性が高い。

瓦質外容器に納められてい



で、縁は上に反り返っている。その下には本体と合致させるための見受けがある。見受けは細長い銅板を曲げ、両端を段切りにして合わせ、裏側を蝟付けし固定している。見受け上部には削り出しによる突起が8箇所があり、これを蓋の穴に差し込んだ後に、突起上部を潰して強固に固定している。

蓋の中央には美しい蓮華飾りの鈕が取り付けられている。上からそれぞれ独立して作られた宝珠・八弁の請花（受花）・刻みのある座金・八弁の反花の組合せで、宝珠内部に固定された2本の銅製針金を、それぞれの中央に空けられた孔を通し、蓋の内側で開いて固定してある。

蓋の高さは鈕を含めて65mm、最大径は153mmを計り、蓋を装着した経筒の全高は312mmであり、12世紀前半代の所産とみられる。

残念なことに経筒内の経巻は消滅していたが、底部や内部壁面に紙片や繊維が僅かに付着していた。この痕跡は底部に対して同心円状に付着しており、木製経軸などが認められないことから、紙本経のみを巻いた経巻の束が縛られた状態で納められていたものと見られる。経巻数は不明であるが、経筒の大きさや痕跡の状況から比較的多かったようである。



↑第45図 経筒底部に付着した経巻の痕跡
←第44図 1号経塚下部石郭出土銅板製経筒実測図



第46図 1号経塚下部石郭上層出土太刀

下部石郭の代表的な副納品はU字形に折り曲げられた太刀である。経塚に短刀が副納される例は多いが太刀は稀である。この太刀は曲げられた付近で折れており、切先側は碎石上に置かれた状態で遺存していたが、把側は碎石に10cm程埋もれた状態で出土している。

遺構の解説で触れたように、上部石郭内の追納時に手が加えられた結果ではないかと考えられるが、いずれも刃部を上に向けた状態であり、その出土状況などから当初副納された状態をほぼ保っていると考えられる。

中子は長さ15cmでX線調査により三ヶ所に目釘穴が認められた。刃渡り55cmで全長は80cm、刃幅は把側で28mm、切先側で23mmを計る。刃の厚さは7～8mm程度と思われるが酸化に伴い部分的に大きく膨らんでいる。中子部分は大きく屈曲しているが、刃部から切先は直線的な造りである。刃装具などは一切出土していない。

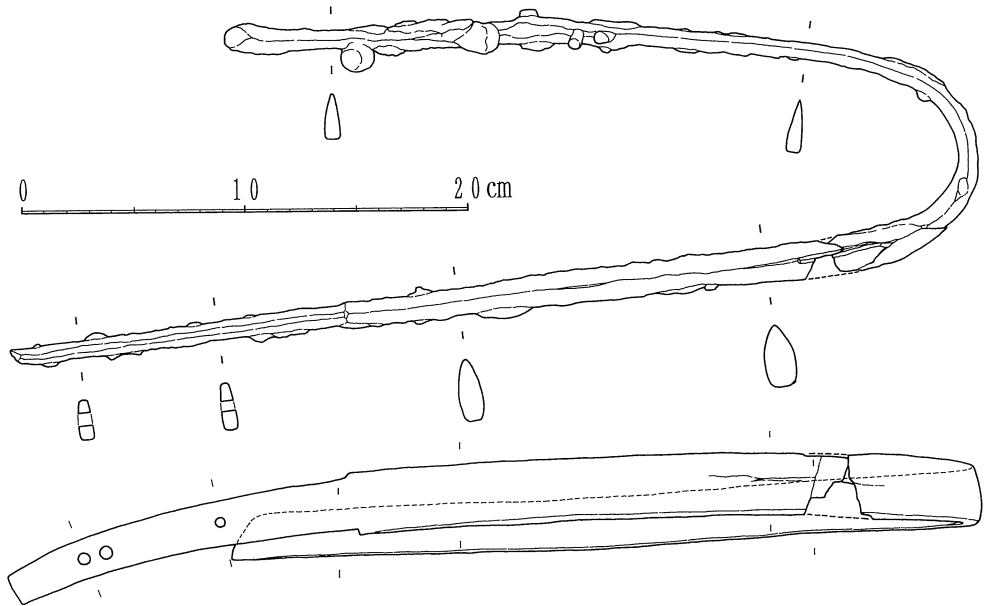
この太刀は使用不可能に加工されて副納されていることから、願主について考える重要な資料となるであろう。U字形に曲げられた太刀の副納例は兵庫県加古川市の江ノ上経塚を始め瀬戸内海沿岸部を中心に4例知られているが、四国では初めての出土である。

下部石郭上部からは他にも3本の短刀が本出土している。いずれも上下石郭を仕切る石材と壁の隙間に切先を上にして立てられていた。中子部分が碎石中に埋もれていたため下部石郭に伴う副納品と考えたが、上部石郭への追埋時でも副納は不可能ではない。それぞれの出土状況や位置は第32図を参考にして頂きたい。

また、石郭南東隅の攪乱部分からも短刀、若しくは太刀の切先部分の破片が1点出土し

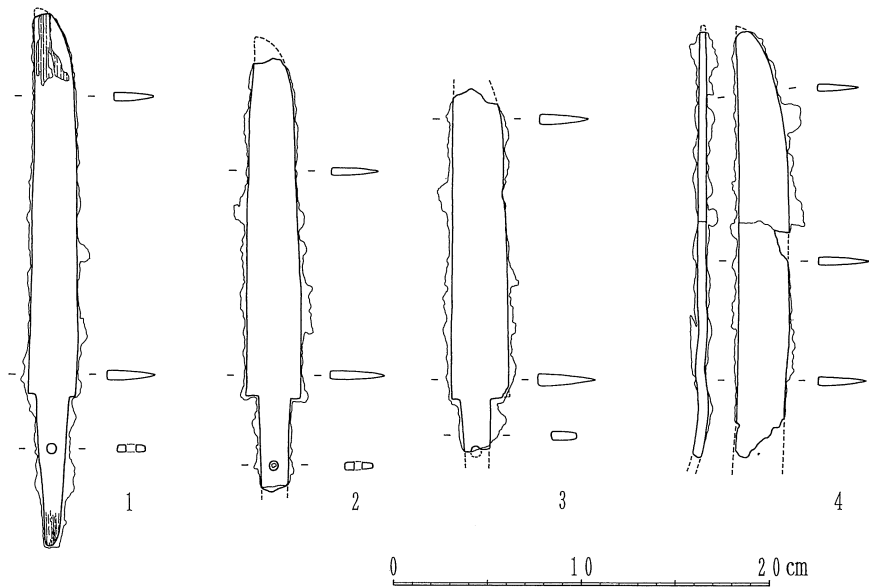


第47図 1号経塚下部石郭上層出土短刀



第48図 1号経塚下部石郭上層出土太刀実測図

ている。これは他の短刀のように立てられていたものか否かは不明であるが、欠損部付近に曲げられた痕跡が認められる。上部石郭から出土した曲げられた痕跡のある太刀先とこの遺物については、攪乱部分からの出土であることから、曲げられてから副納されたものか、酸化により劣化し弾力を失う前の攪乱時に変形したものは現状では不明である。



第49図 1号経塚下部石郭上層出土短刀実測図

出土位置は、1.西側壁面中央部 2.北西隅部 3.東側壁面中央部 4.北東隅攪乱部 ~第32図参照~

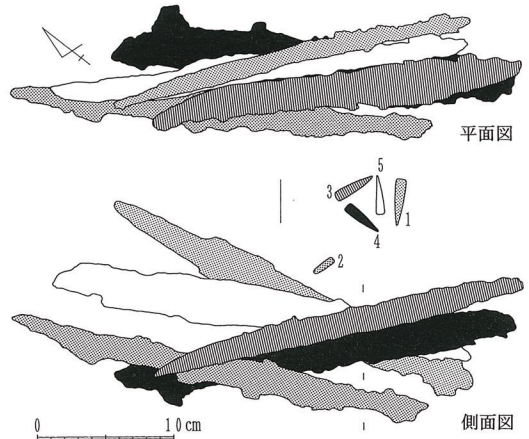


第50図 1号経塚下部石郭副郭出土短刀

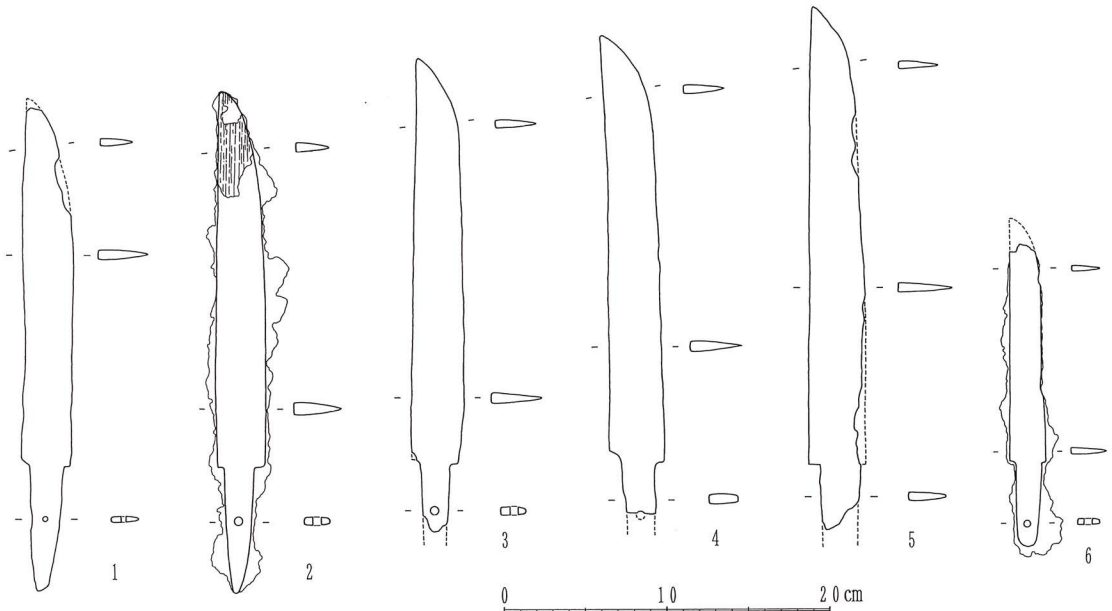
下部石郭の北側半分を占める副郭からは6本の短刀が出土している。(第35図参照)

いずれも床面から10cm程上、副郭北側壁下部を押さえる補強石材に接した位置から出土している。このうち5本は1ヶ所を中心に扇が広がるような状態で錆により癒着しているが、その状況から紐のようなもので束ねられた状態で埋納されていた様子が復元できる。

束ねられていた短刀は30~50cm程度の長さで、もう1点の短刀は20cm程の小型の製品である。いずれも極めて鋭利であり、刃部は幾度も研がれたような形状を呈している。儀礼的な利器ではなく、実用的な利器が副納されたようである。



第51図 1号経塚下部石郭副郭短刀癒着状況実測図



第52図 1号経塚下部石郭副郭出土短刀実測図 ~出土位置は第35図参照~

その他の遺物



図53 1号経塚出土瓦・白磁

上段左から 1. 3. 瓦片 下段左から 5. 白磁片(碗) 2. 4. 瓦片

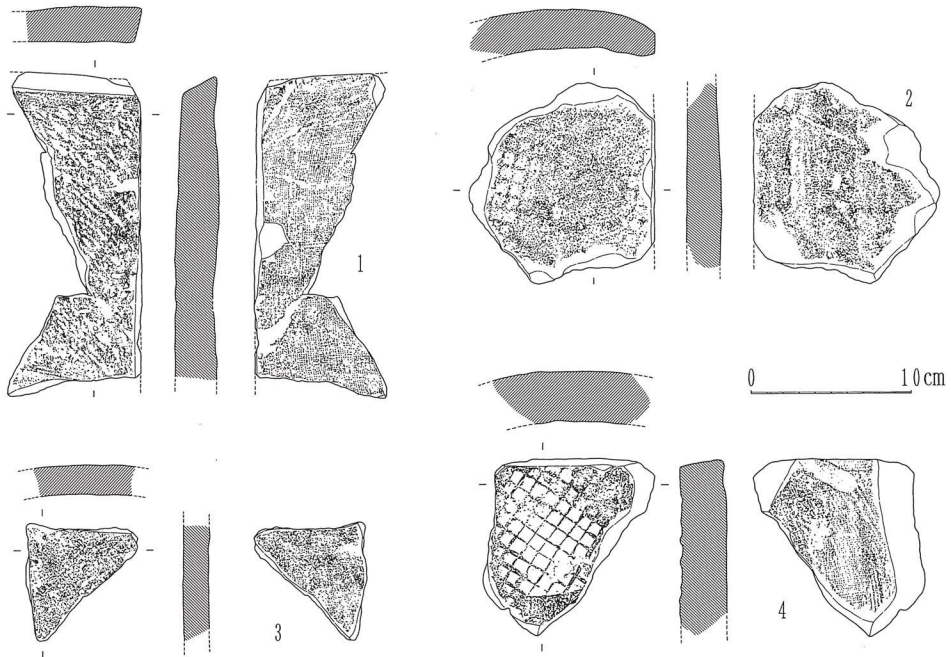


第54図 1号経塚出土刻印瓦片

～出土位置は第29図参照～

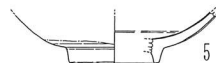
1号経塚では石郭内外から瓦片と白磁片が出土している。下部石郭から出土した瓦片はいずれも碎石中に混入していたもので、軟質なものには破断面が摩滅している。また白磁(碗)も破片であり、意図的に納められたものである可能性は低いように思われた。

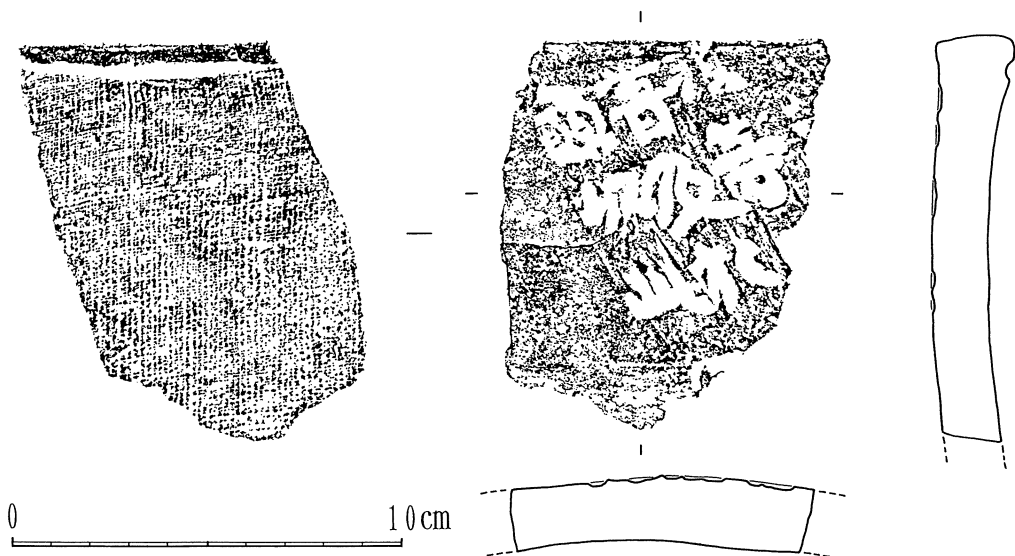
しかしながら、石郭北東隅の攪乱部分上層から出土した瓦片の表面には木版による複数の文字が認められた。左端文字列の左は木版の端であり、左上から「願以此…」次の列が「普及於…」、三列目が「…等…」と読める。奈良国立文化財研究所に分析を依頼したところ、経巻の奥書きなどに使用例が知られる「願以此功德 普及於一切 我等興衆生 皆共成



第55図 1号経塚出土瓦片・白磁片実測図

～1. 2. 5. は掘り方埋土中から、3. 4. は石郭内埋土中から出土～





第56図 1号経塚出土刻印瓦片拓影及び実測図

佛道（願わくは此の功德を以って 普く一切に及ぼし 我等と衆生 皆共に佛道を成ぜん）」
 という廻向文の一部であることが判明した。通常は右上から縦に書かれるべきものが、左上から書かれている点については不明であるが、木版に文字を反転させる際に逆転したものではないかと考えられる。

瓦そのものはこの地域で生産された一般的な平瓦であり、経塚から出土する瓦経とは異なる。廻向文は経巻の奥書によく使われるが瓦の資料は珍しい。また、文字群は範描きなどによるものではなく明らかに木版によるものであり、量産されたものであると思われるが、同様の資料の出土例はこれまでに知られていない。

瓦の出土については、経塚上に限らず、周辺に瓦を伴うような施設があった可能性もある。しかし、他の瓦片はいずれも掘り方内と下層埋土からの出土であり、廻向文の文言には経塚構築目的と共通した意味があることから、意図的に経塚内に埋納されたということも考えるべきであろう。

⑦ 2号経塚跡（消滅） 20頁に掲載したように山頂部の石製祠北西側の大きな掘り方が盗掘孔であったことが判明したが、ここを掘削中に地表面下20～30cm程で、数種類の遺物片が掘り方内北西側に集中し依存していた。遺構は完全に失われていたが、経塚の副納品の要素を持つ遺物と共に経筒外容器の蓋と思われる瓦器片が出土したことから2号経塚跡とした。

遺物は短刀か太刀と思われる鉄器片5点、直径11mm程のガラス玉1点、銭貨（聖宗元寶：初鑄1101年）1点、そして経筒外容器の蓋と思われる瓦器片1点である。ガラス玉の表面は劣化し白色を呈しているが、直径3.5mm程度の孔の周辺には青緑色の部分が残されている。瓦器は直径18.5cm、高さはつまみを除いて5cm程、内面には粗く、外面には密に横



第57図 2号経塚出土遺物

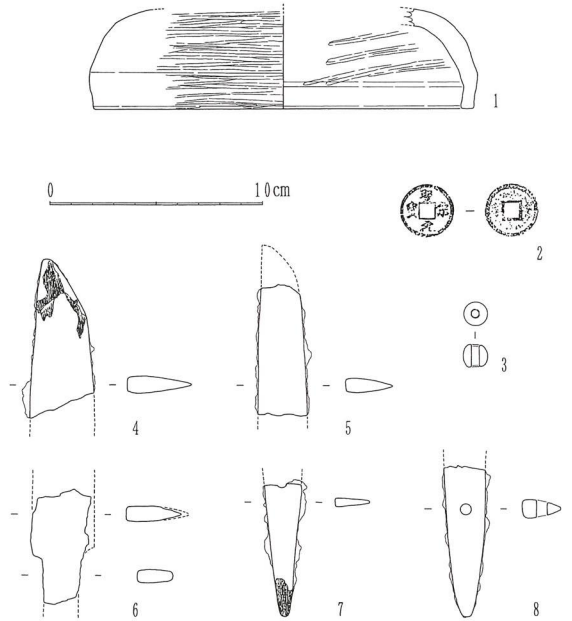
方向の篋磨きが施されている。灰白色を呈しており、胎土は微砂粒を含んでいる。焼成は良好である。

外容器本体は不明であるが、蓋の大きさなどから12世紀末頃の所産と考えられる。

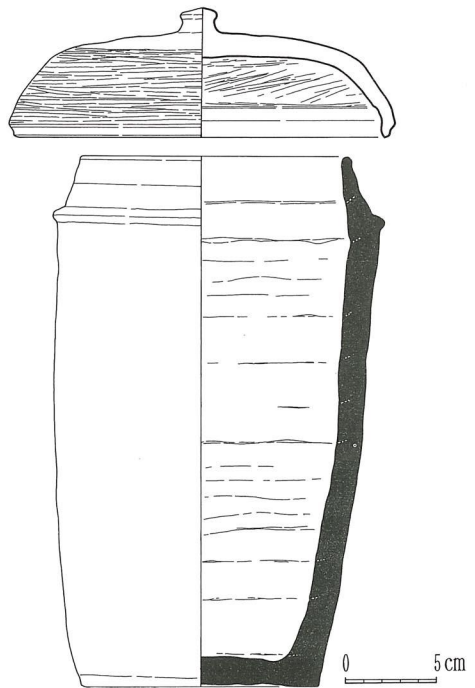
⑧ 3号経塚跡（消滅） 市立郷土館には山頂部の石像の南西側に露出していたという経筒の外容器が保存されている。現地を関係者に確認していただいたところ、その場所は広範囲に攪乱を受けていた。石像に近いことから調査は実施できていないので、遺物のみを紹介する。外容器の身は須恵質で破損した部分はない。暗灰色を呈しており高さ29.4cm、最大径は18.3cmを計る。造りは粗い。蓋は土



第59図 3号経塚出土外容器



第58図 2号経塚出土遺物実測図
～1.瓦器片 2.銭貨 3.ガラス玉 4～8.鉄器片～



第60図 3号経塚出土外容器実測図

師質で淡茶黄色を呈しており、高さ7.2cm、最大径21.4cmを計る。内面は粗く、外面には密に横方向の篋磨きが施されている。出土状況等は確認できておらず、この身と蓋が組み合わせて使用されていたか否かは不明である。

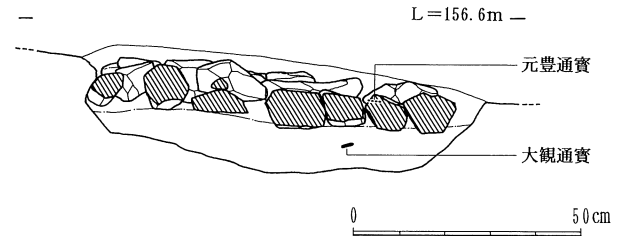


第61図 配石遺構検出状況（南東から）

⑨配石遺構 山頂部の石像西側5m、1号小児壺棺墓のすぐ北側で検出された配石遺構である。ほぼ80cm四方の掘り方中に人為的に平坦に並べられた10~20cm程度の石材が露出している様子は地表から容易に確認できた。

地表面近くを掘削した際に、石材の間から銭貨（元豊通寶：初鑄1078年）が1点出土した。石材の配置や断面と共に記録した後にそれらを取り除くと、その下は少量の小さな碎石を含む乳灰白色の粒子の細かい土で、ここからも銭貨（大観通寶：初鑄1107年）が1点出土した。

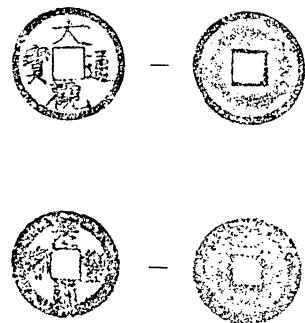
他の遺構の状況から見て、この遺構も上部構造は破壊されているようである。また出土した遺物は2点の銭貨だけであるため、その性格などは明らかにできないが、経塚が造られた時期の祭祀的性格の遺構ではないか考えられる。



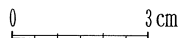
第62図 配石遺構実測図



第63図 配石遺構出土銭貨



第64図 配石遺構出土銭貨拓影



第三章 小 結

ここでは特に山頂部で確認された経塚群について、当時のこの地の社会的環境を加えて考えてみたい。

善通寺市史第一巻によると、11世紀末頃から国衙は国役賦課、公郷在家役徴収などを行い善通寺領を圧迫していた。圧迫は寺が所有していた田地や住民に対する支配権にまで及び、弘法大師の起請によってそれまで築垣の外に出したこともない寺の仏具・宝物のうちから会料と称して、天永三年（1112年）九月国衙が太鼓一面を押収した。このことを善通寺所司が善通寺の本寺である京都東寺に報告しているが、その後「世は己に澆季（末世）に及び、仏法凌遲すと雖も、大師の御遺跡法燈の光未だ消えず」と末法思想を背景とした悲壮なことばを続けている。

この後寺領の一円化と散在が繰り返される課程で、寺は土地や農民に対する支配力を次第に失う。やがて貴族の世から武家政権に支配権が移る。香色山山頂部の経塚群はこの混乱期にあたる平安時代末期頃に造られている。

この頃は、善通寺周辺（旧那珂郡）に勢力基盤を置いていた佐伯一族や善通寺の僧侶達は極めて悲愴な状態にあり、この社会的な混乱を1052年から末世が始まるとされる末法思想の現実化としてとらえることに抵抗は無かったであろう。

経典を写し、経筒や外容器を求め、副納品を集めて香色山山頂に経塚を築いた集団の当時の心情は察するに忍びない。恐らく仏教教典を弥勒出世の世にまで伝える目的よりも、彼らの支配権を保護し取り戻そうとする現世利益的祈願の性格が強かったものと思われる。

聖地である香色山山頂からは善通寺を始め寺領が見渡せる。この場所に数多くの経塚が造られた背景には、このような歴史的事実があった。

立地条件から見て香色山山頂の平坦部はあまり広くはない。しかも既に弥生時代に多数の墓が造られている。末法思想に基づいて次々と経塚が造られ、次第に聖地にその余裕が無くなりつつある状況を見た者は、子孫のために経塚築造予定地を確保しておくことを考えたかも知れない。

また、経塚は天台宗派により考え出されたものであるが、香色山経塚群は真言宗派により造られたものであり、これらのことは1号経塚の二階建構造や特異な副納品について考える上で、重要な要因となると思われる。

1号経塚から出土した遺物のうち、銅製品や青白磁の分析、瓦の文字の解読については奈良国立文化財研究所にご協力頂いた。更に1号経塚の構造とそこから出土した遺物については、調査中多岐にわたりご指導頂いた奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館学芸室 杉山洋氏から特別に玉稿を賜り、次章に掲載した。

第四章 1号経塚と出土遺物

奈良国立文化財研究所

飛鳥資料館学芸室 杉山 洋

1. 遺構

構造 本経塚は上下二段に埋納主体のある二階建構造の経塚であることが注目される。類似する構造の経塚は、和歌山県新宮経塚群如法堂第1経塚に見られるが、ここでは上部石郭との間に、数世紀程度の時期差が見られ、下部の平安時代の経塚に上部の石郭が付加されたような構造になっており、当初から二階建構造を意図した経塚ではない。当初から意図された二階建構造を持つ経塚としては、初めての検出例である。

本経塚では、平安時代の後半に経塚を造るときに、縦長の石材を用いて、大形の石郭を造っている。その下半部に経筒と外容器を置き、いったん石郭中断に側壁と同じ石材でふたをする。後世に抜かれてしまって現存しないが、おそらく石郭上部にも蓋石を置き、石郭内上部は空間のままとしたのだろう。数十年後、上部の空間に経筒と外容器を置き再び蓋をしたものと思われる。

副郭 下部の経塚には経筒と外容器を入れる主郭と、副納品を入れた副郭が存在する。類似の構造は和歌山県高尾山経塚などにも見られるが、きわめて珍しい構造である。

3. 遺物

経筒 経筒には銅を鋳製して作る銅鋳製経筒と、銅板を丸めて作る銅板製経筒の2種類がある。今回発見された経筒は銅板製経筒の典型的な例であるとともに、銅鋳製経筒と比べて小形のものの多い銅板製経筒の中であって、銅板の厚いこと・作りの丁寧なこと・鈕の精巧なことなど、屈指の銅板製経筒とすることができる。

なかでも鈕の精巧さは注目に値する。一般的には、銅鋳製・銅板製を問わず、宝珠形の鈕が付くが、本経筒例では、宝珠の下に受花と反花を置く本格的な宝珠鈕となる。これは時代の古さを示すとともに、この後に四国の経塚に流行する火災宝珠鈕経筒の先駆けをなすものとして注目される。

太刀 経塚の副納品にはしばしば刀剣類を見ることができる。その多くは刃渡り30cm以下の短刀である。今回も短刀はたくさん発見されているが、中に太刀が含まれている。経塚からの太刀の出土はきわめてまれで、今までに岡山県小山経塚、広島県宮地川経塚、兵庫県江ノ上経塚と出土地不明の奈良博所蔵品の4例が知られるだけである。瀬戸内沿岸の経塚に特徴的な副納品であることが知られるとともに、四国では初めての出土例となる。またいずれの出土例にあってもU字形に折り曲げられていることが注目される。

副納品の構成 一般的な経塚の副納品としては、鏡・合子・銭貨などが知られる。ところがこの香色山経塚の下部石郭においては、鉄製の太刀と短刀だけという特殊なあり方が

注目される。副納品用と思われる副郭内にも短刀が重なって置かれるのみであった。他に有機質の副納品のあった可能性は考慮しなければいけないが、太刀の出土も見られるところから、利器に重点を置いた副納品構成が伺われる。あるいは願主なり檀越なりの在俗者の性格に関わる特殊性と考えることもできる。

3. 年代

上部石郭出土の和鏡は、12世紀中頃から後半代に位置付けられる。さらにこの和鏡が経筒の径を示すとすれば、12世紀後半代の銅板製経筒の法量に近似すると言える。輪花のある青白磁皿がやや古く位置付け得る可能性を有するが、経筒に関係する内容からは12世紀後半を中心にした年代が考えられる。

下部石郭は、経筒の大きさや鈕の作りから見て12世紀前半の造営と考える事ができる。

4. まとめ

本経塚は善通寺の裏にそびえる信仰の山からの発見である。銘がなく詳細は明らかではないものの、善通寺の僧侶が深く関与した経塚であることは言うまでもない。また副納品に利器が多いところに、檀越の性格を読みとることができるかもしれない。

今回発見された経塚は、二階建構造の遺構と善通寺の関与という、二つの大きな特徴を有している。まず上下二段の二階建構造は、遺構の型式のみならず、当初12世紀前半に経塚を造営したときに、後代に再び経筒を埋納する事を考慮していた点に、特徴を見いだすことができる。経塚の始まりとして著名な、金峯山山頂への藤原道長の経筒埋納においても、その會孫師道が道長を参考にした経筒の埋納を行っている。親子など数代にわたる経塚造営が他にも数例知られており、今回の経塚では、遺構の上からこうした習俗が知られる好例と考えられよう。

つぎに善通寺の関与については、それが四国真言宗寺院の雄であることに注目できる。真言宗と経塚との関係では、これまで瓦経について論じられることが多かった。確かに中国・四国地方には、延久三年（1071）の鳥取県大日寺瓦経、応徳三年（1086）岡山県安養寺瓦経、天仁二年（1109）徳島県犬伏瓦経といった、古い時期の瓦経が発見されている。四国について言えば、犬伏瓦経が確認される最も古い経塚遺物である。四国へは真言宗の拡大に伴って、まず瓦経として経塚が持ちこまれた可能性が考えられる。引き続きすぐに経筒を使用する紙本経経塚が、香色山経塚や大治元年（1126）徳島県大山寺経塚のように四国にも導入されたと考えられる。ただ鈕の型式など他地方には見られない経筒型式が登場した点に、四国の特徴を見ることができる。

本経塚の発見は、四国における経塚の様相をよりいっそう明らかにするだけでなく、全国的な経塚の展開を考える上でも重要な発見とすることができる。

第五章 ま と め

第一章で紹介したように、各時代の様々な遺跡がいたるところに残されていることから、この地で生活する人々が、彼らの生活域の背後に重なる五つの独立丘陵を聖域として見ていたことは疑いない。そして今回の香色山遺跡群の調査では、山頂部においてこれを裏付ける大きな成果をあげることができた。確認された遺構は弥生時代後期の集団墓と平安時代の経塚群であった。大勢の市民がよく訪れる場所、しかも部分的に露出した状態でこれだけの遺構が犇めき合って残されていたことは大変な驚きである。

弥生時代後期の墓は平野部に多く発見されている。このような独立丘陵の山頂部に造られたものは限られた階級のものと考えらるべきであるが、この地域で弥生時代の墓から副葬品が出土することは極めて稀であり、被葬者の性格を明らかにすることは困難である。しかしながら同時期の所産と考えられるにも関わらず、三種三様な形態の石棺墓が発見されたことは興味深い。

次にこの場所が利用されたのは平安時代後期であり、以前から碑文で知られていた経塚以外にも多数の経塚が群集していることも判明した。中でも上下二段構造の経塚の発見は評価される。下部石郭は未盗掘であり、多くの情報が残されていた。また上部石郭が盗掘されていたことは残念であるが、埋納の時代を知る手掛かりとなる断片的な遺物も含まれており、今後の経塚研究に重要な資料が加えられることとなった。

経塚は構築される立地条件が限られていることから、平地で盛んな開発事業などとは余り縁が無く、発見調査される機会が少ないが、全国各地に多数残されていることは知られている。これは県下でも同様で、瀬戸内海歴史民俗資料館が1977年に発刊した「四国地方経塚地名表」によると、平安時代から近世までの各時代の経塚が39件報告されており、経塚参考地はこの他に50件近くを数える。

蓋に火炎宝珠鈕の装飾を持ち、阿弥陀来迎図が線刻された銅製金箔経筒や多数の副納品が残る三豊郡の千手院経塚（平安）や、多数の銅鏡が副納されていた同三豊郡の船積寺跡経塚（平安後期）などが有名であり、他にも多数の遺物が伝わるが、いずれも正式な発掘調査による発見ではないため、遺構の記録や埋納状態を知ることはできない。唯一1963年満濃町で調査された金剛院経塚（鎌倉）のみ埋納状態までの記録が残る。

今回1号経塚の遺構や遺物、その埋納状態の調査で得られた様々な情報は、讃岐の経塚を考えるだけでなく、今後全国的に経塚の性格や造られた環境を考える上で高く評価される。経巻は風化消滅し経筒に銘文などは認められないが、遺構の構築場所の歴史的環境から、弘法大師の末裔である佐伯一族と真言宗総本山善通寺が関わったものであることは疑いない。願主が属する集団や宗派などの手掛かりもある程度明らかにできる大変貴重な資料であり、今後の経塚研究の発展が期待される。

また、山頂部の遺構群は埋め戻したが風化は続いている。この調査を契機に再評価された香色山経塚群の保存整備に努めたい。

- 参考文献 「香色山経塚について」香川県考古学会報告 安藤文良 1961年
「金剛院の経塚発掘について」文化財協会報特別号 草薙金四郎 1963年 6月
「讃岐の経塚」古代文化21巻7号 六車恵一 1969年
「善通寺市史第一巻」善通寺市 1977年 7月
「四国地方経塚地名表」瀬戸内海歴史民族資料館 1977年10月
「経塚」ニューサイエンス社 1985年 3月
「播磨江ノ上経塚発掘調査報告書」瀬戸内考古学研究所 1988年 3月
「浄土への祈り」杉山 洋（雄山閣） 1994年 9月
「鏡の美」高松市歴史資料館特別展示図録 1995年 1月

香色山山頂遺跡群調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 4～

平成 8 年 3 月 31 日 発行

編 集 香川県善通寺市文京町 2 丁目 1 番 4 号

発 行 善通寺市文化財保護協会

印 刷 (株) 四 国 工 業 写 真

